

毎日芸術賞の人々 ③

菅 木志雄さん

美術I部門

「菅木志雄」展「菅木志雄 置かれた潜在性」展の成果



すが・きしお 盛岡市生まれ。多摩美術大絵画科卒。在学中から作家活動を始める。国内の美術館や画廊で個展を多数開催し、伊ベネチア・ビエンナーレ(1978年)など海外の美術展にも参加。71歳。 —丸山博撮影

「もの」に時代が合ってきた

「賞のため一生懸やるわけでは全くないけれど、頂けるのはうれしいものです」

1960年代末・70年代に台頭した前衛美術の動向「もの派」の中心的作家。豊かな自然の中に野外作品を置いた

「菅木志雄」展(静岡・ウ・ア・ン・シ彫刻庭園美術館)と、主に屋内に大型インスタレーションを展示した「菅木志雄 置かれた潜在性」展(東京都現代美術館)が受賞対象になった。いずれも展覧でも、自身がスタイルを確立した70年

代の作品を空間に合わせた新バージョンとして発表。新作や「アクティヴェイション」と呼ぶパフォーマンスも披露し、一貫した創作姿勢と現代までつながる問題意識を鮮やかに示した。

本格的な回顧展は約15年ぶり。「いつも(観客の)入りは気にならない」と笑うが、今回は期するものがあつた。「時代が合ってきたとでも言いますか。40年前は理解されなかった、人間の意識を活性化させる要素としての『も

の』を感じ取る人が増えていたのではないかと、そう感知させたのは約12年に米国の有名美術館が開催した「もの派」のグループ展だ。米国内にとまらず欧州

からも美術愛好家が集まり、自作品の多くが海外の美術館に収蔵された。現代美術の流れの中で、やっもの派が重要な動向と認知された。日本の展覧会場でも時間をかけてじっくり鑑賞する人の姿が目についた。木や石、鉄板などの素材をほとんど未加工のまま、置き並べた作品は一見、取っつきにくい。だが

見るうちに場から溢れ出てくる気配に感覚が研ぎ澄まされていく。時に危うさ、時に不穏さを感じさせる物質同士のパランスは、現代社会や人間心理の暗喩にも思えてくる。

「もの」も人間もボソンと独立して存在することはあり得ない。空間との関係性の中で支え、支えられている。ものと世界のあり方を、それぞれ自身が納得することが大事だね」

64年に米大に入学したが「表現とは何か」と思い悩み、絵筆を執れなくなった。「二種の虚構であるイメージ」に着想を求める既存の造形表現に飽きたらなさも感じていた。膨大な量の本を読み、思考する日々を経て、ありふれたイメージを排し、実体ある「もの」を即物的に用いる表現に行き着いた。

静岡・伊東にあるスタジオオは、多種多様な素材と電動ドリルなど工具類がびしり詰め込まれている。来住は国やイタリアなど、個展を開く予定だ。「これからも手が動く限り、制作を続けまーす」

【永田静子】
二二二二